

近代文学評論大系

2

明治期Ⅱ

編集

稲垣達郎

佐藤勝

角川書店

近代文学評論大系

第2巻 明治期Ⅱ



編者

稲垣達郎

佐藤勝

発行者

角川源義

印刷所

暁印刷株式会社

製本所

株式會社 宮田製本所

発行所

株式會社 角川書店

東京都千代田区富士見二の一三
☎一〇二 ☎東京一九五三〇八
電話東京(二六五)七一一一

昭和四十七年六月三十日 初版発行

© Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取り替えいたします

3391-580602-0946(0)

目次

第一部

美術の翫賞

聊か思ひを述べて今日の批評家に望む

何故に大文學は出ざる乎

小説を読む眼

下流の細民と文士

觀念派の小説

小説界の新潮流（殊に泉鏡花子を評す）

『早稻田文學』記者に答ふ

今の文學社會に對する希望の一ヶ條

小説界の新潮を論ず

小説界の前途

社會小説出版豫告

柳村三

藤村三

内村鑑三

抱月子

田岡嶺雲

Y. T. 毛

魯庵生

矢野文雄

抱月子

宙外生

毛

社會主義の必要

大西 祝 弐

社會小説

叁

〔所謂社會小説〕

叁

社會小説論

島村抱月 亮

所謂社會小説を論ず

高山林次郎 三

所謂社會小説

金子馬治 弐

ゾラ『戰塵』の後に書す

不知庵生 八

政治小説の機運

全

政治小説を作れよ

内田魯庵 六

〔小説界の新生面〕

宙 外 五

我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務

高山林次郎 五

小説革新の時機

高山林次郎 二〇

國民性と文學

綱島梁川 二〇

時代の精神と大文學

高山林次郎 二四

小説家志願の人に答ふる書

歴史畫の本領及び題目

理想の讀者

文明批評家としての文學者

『野の花』序

作者の主觀

主觀客觀の辨

美的生活を論ず

美的生活とは何ぞや

美的生活とは何ぞや

美的生活論とニイチエ

我が所謂「美的生活」

美的生活論を讀んで楊牛子に與ふ

文壇近時の風潮に就て

抱 月 二七

高山林次郎 二九

小杉天外述 二三

高山林次郎 二五

田山花袋 二五

田山花袋 二五

花袋生 二五

楊牛生 二五

浩々歌客 二六

長谷川天溪 二六

登張竹風 二六

久保天隨 二七

樋口龍峽 二八

孤島 二八

解嘲

ニーツエ主義と美的生活

馬骨人言

馬骨人言を難ず

高山樗牛に與ふ

現代文學に缺如せる二方面

新思潮とは何ぞや

自然主義的傾向

自然主義に就て

自然主義とは何ぞや

何故に余は小説を書くや

遊戲文字の辨

遊戲文字と有要文字と

文學美術に於ける不自然

登張竹風 一六九

長谷川天溪 一六九

× × × 二〇四

竹風生 二四二

與謝野鐵幹 二四八

樋口龍峽 二五〇

長谷川天溪 二六三

維舟生 二六九

長谷川天溪 二七四

長谷川天溪 二七六

蘆花生 二八五

孤島 二八九

維舟 二九四

佐々醒雪 二九七

現實小説

佐々醒雪 二九

小説家と社會

佐々醒雪 三〇

寫實主義の根本的謬想

田岡嶺雲 三〇

寫實主義の根本的謬想とは何ぞや

平尾不孤 三〇

寫實主義の根本的謬想とは何ぞやとは何ぞや

田岡嶺雲 三一

田岡嶺雲氏に答ふる書

平尾不孤 三〇

道德の超越性

綱島梁川 三一

思想問題

抱月 三一

社會と文學

大町桂月 三七

人生問題の研究と自殺

長谷川天溪 三一

現代不健全なる二思想

大町桂月 三五

露骨なる描寫

田山花袋 三六

『露骨なる描寫』とは何ぞや

劍南 三三

現代思想の暗潮

田岡嶺雲 三七

研究的精神の缺乏

文學の試験的方面

自然と不自然

國歌としての『君が代』

戦後文界の趨勢

如是文藝

第二部

三人冗語 たけくらべ

雲中語 多情多恨・源叔父

長谷川天溪 三三

長谷川天溪 三七

長谷川天溪 三〇

松岡荒村 三三

夏目漱石談 三六

抱月生 三三

森鷗外 三九

齋藤綠雨

幸田露伴

露伴 四〇

綠雨

學海

鷗外

篁村

『國民の友』を惜む

早稻田文學の廢刊を惜む

評家及び作家としての不知庵

牛門の泉鏡花と小栗風葉
二秀才

『初すがた』序

天外の初姿

『はやり唄』叙

『はやり唄』の評の評

地獄の花を読む

重右衛門の最後（田山花袋作）

野 心（永井荷風著）

金色夜叉上中下篇合評（抄）

紅 葉

思 軒

高山林次郎 四〇四

高山林次郎 四〇五

高山林次郎 四〇七

鳥 水 四〇八

天 外 四〇六

星 月 夜 四〇七

天 外 四〇八

孤 島 四〇九

支 峯 四一四

重右衛門の最後（田山花袋作） 四二六

渟 鷗 生 四二七

安田衡阿彌 四二九

平田 禿 木

藤村子の小説

紅葉先生

甲辰文學（火の柱）

作家ならざる二小説家

解 説

総 説

解 題

星 野 天 知

依 田 學 海

鈴 木 春 浦

森 隱 流

上 田 柳 村

尾 崎 紅 葉

四四〇

泉 鏡 花 四四三

小 栗 風 葉

孤 島 巽 四四六

田 岡 嶺 雲 四四一

稻 垣 達 郎 四六五

佐 藤 勝 四七四

凡例

一、本巻は明治二十八年から同三十八年ころまでの期間に執筆発表された評論を収録した。
一、作品本文は、第一部・第二部に分け、第一部には主として前記年代の文芸思想を窺いうる主要な評論、第二部には雑誌刊行の辞をはじめ、当代作家・作品を対象とした評論などを収めた。

一、作品本文の配列は、原則として発表年次に従ったが、論争などは一括して並べるなど、内容的配慮も加えた。

一、作品本文の文末には掲載誌（掲載単行本、掲載年月（日）を（ ））に入れて示した。

なお、連載作品は、連載各回ごとの文末に同じ要領で示した。

〔読売新聞〕明三二・八・七〕↓〔読売新聞〕明治三十二年八月七日

一、作品の筆者名のうち、初出掲載時に無署名で、これを推定したものは、その名を（ ）に入れて区別した。

一、作品本文は、すべて初出（雑誌・新聞・単行本）に従った。

一、無題の作品は、内容から推して標題を付し、これを「 』に入れて他と区別した。

一、作品本文の用字、字体、かなづかい、句読点、傍点・傍線などは原文のままの復原につとめた。ただし、ルビは適宜取捨し、明らかな誤記・誤植・脱字などは、これを正した。また誤植と認められるものでも、いく通りかの修正が可能なものは原文のままとし、（「マ」）とルビを施した場合もある。

第一部

美術の翫賞

柳 村

このころ吾邦の思想界にも美術を云々するもの漸く其數を増し、技藝の神を評し製作の妙を説きたるもの、往々雜誌の類に散見するに至れり。これ畢竟吾文化の漸く成らむとする兆にして國家の大慶なれども、歩を進めて此等審美評家の見識好尚にたち入りて考ふれば、吾從來學びし所及び信ずる所と説を異にせるもの少からず。されば果敢なき心を拙き筆に托して茲に美術の翫賞を説かむとす。

竊に思ふ、美術を愛する人間の情は、彼の冷索たる品隣を加へて、こちたき談議を試むるの謂にあらず、必らずや吾人が一の美術品に對する時、其眼耳に及ぼせる感覺に因て一種の興奮を起し、忙中に閑あり、動中に靜あり、亂れたる如くにして序あり、雜れる如くにして法あり、終に悲みの裡に歡びを寓するに至る、一言すれば温情熱意の間に美の影を認め、暫らく彼の樂園を夢みるものなり。されば美

術の眞味は情濃かに感敏き熱意の人にして始めて曉り得べく、輕佻浮薄なる徒輩の眼に寫り來らざるや必せり。吾等人類は生れながらにして皆美を尙ぶの感を有せるものなれど、此心のみは理論思議の教を以て發達し得可きものならずして、吾等が棲む社會の民俗により、氣候により、地位によりて大に影響せらるゝものなり。かの一代の人心を擧げて美の一筋を追はむとするほどにあらずむば、美術の旺盛は期し難く、胸に餘る情熱を傾けて詩神の祭壇に跪かずむば、誰か能くアポロの子たるべき。美術を味はむと欲せば之を愛すべし、之を慕ふべし、之を戀ふるべし。況んや自ら技藝の人たるに於てをや。

世俗の美術を談ずるは多く傳説に従ひ、他人の言に盲從する者にして、自ら之を戀ひ之に懂かるゝもの少なし。才徳は人の尙ぶ所なり、愛する所なり、而も能く自ら進むで理想の仰ぐ所に達せむとあせるもの少なき如く、世の美を語り藝を云ふ者に往々雷同附和の徒を見る。人物論多少の審美感あり。よき女の袖にふれて心地あしきものあらむや。秀たる山川の姿を望みて心ひろがらぬものやある。されど唯これのみにしては終に皮相の感たるに過ぎず、鼻筋の通りたるを悦び睫毛の長きを愛し、正しき輪廓の踵、優しきを賞づるやうになりて初めて美を談ずべし。風景に於ても亦同じ理なり、遠き山々の薄紫、落日の名残に様々の色を

含みて、紺青の空、黄金の雲、斜雨鮮かに注ぎて夕暮の虹うつろひたるに心を留めて終に技藝の妙を味ふに足る。今の世に美術の盛なるもの無きは社會の咎、風俗の然らしむる所なりとはいへ、一つには審美評家の徒、美を愛せずして美を語り、藝を尙はずして藝を評すればなり。

茲に吾が美術といひ來りしものは、重に建築、彫刻、繪畫、音樂、詩歌の五大技術を意味し、併せて表情舞踏、染工職工の術等に至る迄凡べて美といふものゝ顯はれたるを含む、而して美術家の眼は宇宙の幽玄なる靈界を馳めぐりて其神を捉へ其妙を探らむとするに當り、勢ひ具象の物牀よりせざる可からず。花の色、雲のたゞずまひ、人の姿、山の形、此等は凡べて美術家の材料なり。おしなべての人は生なきものと云ひて土塊金石の類を棄つれど、深く考ふれば其質其色にそれぞれの意を宿として、美の發揮せられたるを見る。まして草木花葉の類に至りては、細き莖、豐なる穂、雲を凌がんとする幹の雄々しさより、露にも堪へぬ花の一本まで、大地の胸に抱れて靜なる養を享くるめでたさあり。況んや黒眼がちの恨みをや、直ぐなる頸のたかぶりをや。

或は曰ふ、美術は多くの種別を有すれども、其本義に於てけぢめなし。詩を有聲の畫といひ、畫を無聲の詩といふ。詩や樂や畫や各美術家が有する想像力の一定の量が、特殊

の材を假りて發揮せられたるに過ぎず、東家の歌人が琴を抱かざりしも、西家の樂人が筆を染めざりしも、只偶然の機なりしのみ。彼等は其精神に於て異なることなし。其天才に於て差あることなし。畫をゑがく者は色彩を施し、樂を修むる者は。音響を調のへ、詩を作る者はたゞ韻律をならぶるにすぎずと。此の如き審美説は汎く世俗に行はれ、少しく學識ある者も口にするを耻ざるものなれど、心を靜めて再考すれば淺膚皮相の謬説のみ。これ評家が眞正に美を愛する人なりや否やを決する試金石にして、以て其肺肝を透察するを得可し。

美術を味はむと欲する者は先づ眼と耳とを用ゐて、製作品が吾人の官覺に訴ふるものより吟味せざるべからず。例を求むれば繪畫の妙を決するものは、先づ運筆の勁弱、色彩の適否、位置の配合にあり。如何となれば美術家が神采の冥想を紙幅の裡に藏めむとするに當りて、其精神は直に無意識の動作を以て具象のものとなり、調和は色彩にあらはれ、動搖は陰影にあらはれ、觀るひとが官覺を襲ひて毫無理議の闖入する事を許さざればなり。風景畫を取ていはむに、野徑横に走りて綠陰の連れるあたりに没し、紅の花、青き草の色彩に奔麗の意を寄せ、紫の雲、黄金の麥田に豐沃の心を寓するなど、毫も世俗の喝采を博する文學的意義を加へずして眞正の審美感を歡ばずに足る。朱紫青綠等の